

■全26作家紹介

	作家名	点数 (新作数)	設置場所
1	あおき のえ 青木 野枝	7 (7)	46階 PENTHOUSE Lounge 39～44階 LUXURY HOTELエレベーターホール
2	おおまき しんじ 大巻 伸嗣	2 (2)	45階 Restaurant Bellustar、Bar Bellustar
3	ほそくら まゆみ 細倉 真弓	2 (2)	45～47階 PENTHOUSE客室
4	あらき のぶよし 荒木 経惟	1 (－)	45～47階 PENTHOUSE客室
5	かわうち りんこ 川内 倫子	2 (－)	45～47階 PENTHOUSE客室
6	のむら さきこ 野村 佐紀子	2 (－)	45～47階 PENTHOUSE客室
7	はなが みつとし 羽永 光利	3 (－)	45～47階 PENTHOUSE客室
8	やまもと ただし 山本 糾	1 (－)	45～47階 PENTHOUSE客室
9	みとべ はるな 水戸部 春菜	32 (32)	39～40階 LUXURY HOTEL客室
10	さわむら すみこ 沢村 澄子	39 (39)	18階 LUXURY HOTELロビー 47階 SPA sunya、43～44階 LUXURY HOTEL客室
11	しんじょう だいちろう 新城 大地郎	37 (37)	1階 ホテルエントランスエレベーターホール 41～42階 LUXURY HOTEL客室
12	ささき るい 佐々木 類	36 (36)	1階 LUXURY HOTELラウンジ「BELLUSTAR One」
13	たまやま たくろう 玉山 拓郎	3 (3)	36～38階 ENTERTAINMENT HOTEL 客室
14	かいほう よしあき 開発 好明	3 (3)	33～35階 ENTERTAINMENT HOTEL 客室
15	わしお ともゆき 鷺尾 友公	3 (3)	30～32階 ENTERTAINMENT HOTEL 客室
16	ぬきゆう ぬQ	1 (1)	20～38階 ENTERTAINMENT HOTEL 客室内テレビ 映像
17	にし の たつ 西野 達	1 (1)	17階 JAM17 BAR
18	たけなか みゆき 竹中 美幸	1 (1)	10階 映画館Premium Lounge「OVERTURE」
19	サイドコア SIDE CORE	7 (7)	6～7階 劇場ロビー、ホワイエ
20	SIDE CORE×しょうぶ学園		
21	チン↑ポム フロム スマッパグループ Chim ↑ Pom from Smappa!Group	1 (－)	2階 エントランス
22	しの はら うしお 篠原 有司男	1 (1)	1階 エントランス
23	もりやま だいどう 森山 大道	5 (－)	1階 エントランス 45～47階 PENTHOUSE客室
24	ムラタ タケシ	1 (1)	1階 屋外ビジョン「KABUKICHO TOWER VISION」
25	あさい ゆうすけ 浅井 裕介	1 (1)	地下2階 ライブホール／ナイトエンターテインメント 施設 ラウンジ
26	あだち きいちろう 足立 喜一郎	3 (3)	地下3階 ライブホール／ナイトエンターテインメント 施設 ダンスフロア

1.【青木野枝】 **新作** ※2022年12月22日発表

作品名:「水の光」

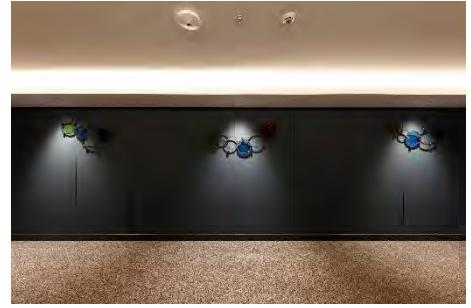
素 材:鉄、アンティークガラス

サイズ:—

新宿は刺激的なものたちで溢れる街。時間と記憶を遡ると、ゆったりと水脈が流れる土地であることにも気付かされる。もうひとつの作品「空の光」にも呼応し、鑑賞者はその水脈の流れに揺蕩うような光を「水の光」と題した計6点の新作を本施設39～44階のBELLUSTAR TOKYO, A Pan Pacific Hotelエレベーターホールで見つけることができるだろう。

[プロフィール]

1958年東京生まれ。1980年代より鉄を素材とした彫刻を制作。素材本来の硬質感や重量感、あるいは彫刻の従来のイメージから離れ、シンプルな素材、技法ながら、作品の置かれる場、空間全体を意識した作品を生み続ける。その革新的な実践は高く評価され、美術館での個展、コレクション多数。近年はガラス、石膏、石鹸など、さまざまな素材に取り組んだ作品を発表している。



撮影:木奥恵三

2.【大巻伸嗣】 **新作** ※2022年12月22日発表

作品名:「Gravity and Grace: Lucidus (Lucida)」

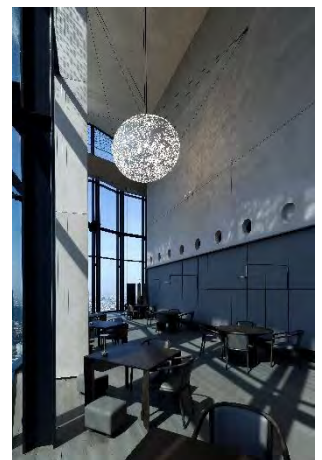
素 材:鉄、ウレタン塗装、LEDライト、その他

サイズ:Φ250cm

リズムを持った時間の流れや、空気や重力も含めた空間の存在を感じさせてくれる大巻伸嗣氏。本施設45階に位置するレストランにΦ250cm、バーにΦ150cmの大型作品を展示した。天井から吊られた金属の球体の中で白、青色のLEDがゆっくりと点滅し、かつて新宿に広がっていた水景からイメージした表面の水紋や花などのモチーフが影絵のようにして、壁や天井、そして床に幻想的に映し出される。

[プロフィール]

1971年岐阜生まれ。「存在」とは何かをテーマに制作活動を展開する。環境や他者といった外界と、記憶や意識などの内界、その境界である身体の関係性を探り、三者の間で揺れ動く、曖昧で捉えどころのない「存在」に迫るための身体的時空間の創出を試みる。



撮影:木奥恵三

3.【細倉真弓】 **新作**

作品名:「XXX」

素 材:顔料インクジェットプリント

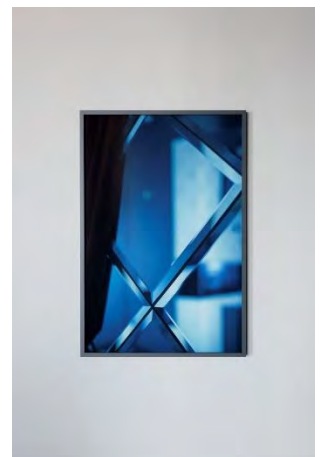
サイズ:H90cm x W60cm

細倉真弓氏が新宿歌舞伎町の街を撮り下ろしたシリーズ「KBK-ZOZZ-ZOZE」。路上のゴミ、水たまりに映り込むネオン、ホストクラブの店内などが断片的に切り取られている。個々の質感が強調され匿名性が高まり、一見すると歌舞伎町が被写体とは気がつかない。しかし、背景にはこの街固有の物語があり、細倉は想像することを促す。パーティーが終わったあのような空虚さを湛えた写真群は、街の喧騒が静まる一瞬のような新たな歌舞伎町像を立ち上がらせている。

協力:Smappa!Group

[プロフィール]

1979年京都生まれ。触覚的な視覚を軸に、身体や性、人と人工物、有機物と無機物など、移り変わっていく境界線を写真と映像で扱う。近年はフォトグラムや写真プリントに刺繍を施すなど、写真をベースにアナログかつ別のメディアを重ねることで実物観や実在感を求める新たな試みを行っている。主な写真集に『NEW SKIN』(2020年)、『Jubilee』(2017年)などがある。



撮影:木奥恵三

4.【荒木経惟】

作品名:「Flower Rondeau」

素 材:RPプロクリスタルプリント

サイズ:H68cm×W101.6cm

日本を代表する写真家・荒木経惟氏のアイコン的な被写体である花をとらえた「花曲」シリーズより。切り花をアレンジすることは、短い時間であっても、自然に息づいていた姿をリバイバルさせること。荒木氏にとって朽ちていくその花を被写体とすることは、儚さの美を永遠にすること。本シリーズに、荒木氏はこう言い残している。「花は死に近づくとより生き生きとしてくる。枯れる直前が一番きれいだ。近づいて性霊に酔い花曲を聴く。」

[プロフィール]

1940年東京生まれ。妖艶な花々、緊縛ヌード、空景、食事、東京の街、飼い猫、様々な被写体から強烈なエロスとタナトスが漂う独特の写真世界を確立し、日本を代表する写真家として国内外で高い評価を受ける。「Tokyo Comedy」(1997年、ウィーン・セセッション)をはじめ国内外で多数の個展を開催。1990年日本写真協会・年度賞、2008年オーストリア科学・芸術勲章、2012年第54回毎日芸術賞・特別賞、2012年第6回安吾賞を受賞。



撮影:木奥恵三

5.【川内倫子】

作品名:「無題(シリーズ「Illuminance」より)」

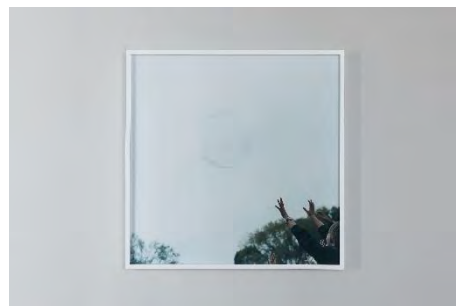
素 材:タイプCプリント

サイズ:H50cm×W50cm

「Illuminance」は「照度」という意味を持つように、光という写真の命題に向き合った作品シリーズ。この世界に満ちている光と闇、そして生と死。美しさと同時に悲しさをも含有する川内倫子氏がとらえるそれらの断片は、時間や場所をも超えて、普遍とは何かを私たちに訴えかける。崇高でありながらささやかに、私たちが見ているこの世界の新しい扉を開く。

[プロフィール]

1972年滋賀生まれ。2002年『うたたね』『花火』で第27回木村伊兵衛写真賞受賞。2009年第25回ICPインフィニティ・アワード芸術部門を受賞するなど、国際的にも高い評価を受け、国内外で数多くの展覧会を行う。主な著作に『Illuminance』(2011年)、『あめつち』(2013年)、『Halo』(2017年)など。個展「川内倫子:M/E 球体の上 無限の連なり」(2022~23年、東京オペラシティ アートギャラリー／滋賀県立美術館)を開催。



撮影:木奥恵三

6.【野村佐紀子】

作品名:「十代目松本幸四郎 残夢」

素 材:ゼラチンシルバープリント

サイズ:H60cm×W40cm(シートサイズ)

七代目市川染五郎(当時)の舞台と舞台裏を約17年間にわたり撮影した野村佐紀子氏。ここには歌舞伎公演初座頭をつとめた演目「怪談敷島譚」(傾城敷島太夫役)の時の舞台裏が映し出されている。色彩溢れる歌舞伎の世界をあえてモノクロで表現し、染五郎が演じた役の表情や動きを通して「役の本質」を浮かび上がらせている。

[プロフィール]

1967年山口生まれ。1991年より写真家・荒木経惟氏に師事。人物や男性ヌードなどを撮影した静謐な表現で国内外に知られる。漆黒のモノトーンの色を基調とする中、夜と朝のあわいを想像させる作品なども発表している。主な写真集に『裸ノ時間』(平凡社)、『愛ノ時間』(BPM)、『黒闇』(Akio Nagasawa Publishing)、『夜間飛行』(リトルモア)など多数。



撮影:木奥恵三

7.【羽永光利】

作品名:「新宿ミラノ座」

素 材:ゼラチンシルバープリント

サイズ:H107.4cm×W101.8cm(イメージサイズ)

1960-70年代、後に大成する才ある若い芸術家が多く居住していたJR中央線沿線。新宿はその文化的な中心地で、当時、阿佐ヶ谷在住でフォト・ジャーナリストであった羽永光利氏は、常に舞踏やアングラ演劇、前衛芸術の関係者と寝食を共にして、至近距離で彼らを記録し続けた。羽永氏による「新宿ミラノ座」からは、如何に羽永氏が新宿の町や路上に介入し人々に寄り添っていたのか、その親密さがうかがえる。

[プロフィール]

1933年東京生まれ。1960年代よりフリーのカメラマンとして『アサヒグラフ』などで写真と記事を掲載。弱者や市井の人々の視点から、舞踏や小劇場、前衛芸術家のハプニング、更には公害、学生運動、コミュニケーション活動などの多岐に渡る現場に介入し至近距離で一貫して供走り記録し続け、遺されたカットは10万点以上。1999年の逝去後は国内外での展示の機会が増え、2017年に1000ページの作品集『羽永光利 一〇〇〇』を刊行。再評価の機運が高まっている。



撮影:木奥恵三

8.【山本紉】

作品名:「Jardin01」

素 材:インクジェットプリント

サイズ:H99cm×W124cm

皇居の濠を撮影したシリーズ「Jardin」より、本作は同モチーフを8×10の大判ポラロイドカメラで撮影した。山本紉氏の捉えた東京の「中心」は、ロラン・バルトの著書『表徴の帝国』に記されたように、木々の連なりや濃厚な緑、濠に湛えられた水と、その先にある日本の象徴的な空間を提示している。

[プロフィール]

1950年香川生まれ、写真家。宇宙の理により様々に形を変える地球上に在る水を主な被写体とし、レンズによって取り込まれ暗箱の中で縮減され模型として定着される「写真」を探究する。主な展覧会に個展「光・水・電気」(2012年、豊田市美術館)、個展「落下する水」(2010年、国際芸術センター青森)、「写真の過去と現在」(1990年、東京国立近代美術館／京都国立近代美術館)など。東京都写真美術館をはじめ国内外の美術館に作品がコレクションされている。



撮影:木奥恵三

9.【水戸部春菜】 新作

作品名:「踊 下平井の鳳凰の舞」

素 材:紙にミクストメディア

サイズ:W120cm×H60cm

人の動作や所作を捉えて、力強いストロークで描きあげられたドローイングと色彩面は、一見、抽象的にも見えながら、躍動感にあふれている。全方位へと窓で開かれた客室で、日本の中心的な繁華街である新宿の高層階から日本文化を見渡すように、各地域に残る伝統的な43の「風流踊り」の動きを取り上げて、組み合わせで展開している。

[プロフィール]

1995年神奈川県生まれ。さまざまな素材や技法を組み合わせ、人や動物が動くモーションの表現を端的に抽象化させることを得意としている。主な展覧会に、個展「Happy End」(2022年、IDEE 自由が丘店)、個展「town」(2021年、galleryN)、個展「don't try」(2021年、西武渋谷店)、「群馬青年ビエンナーレ2021」、「第23回岡本太郎現代芸術賞」(2020年、岡本太郎美術館)など。



撮影:木奥恵三

10.【沢村澄子】 **新作**

作品名:「いろは歌」

素 材:墨、紙

サイズ:H180cm×W432cm

地上界の喧騒から遥かに離れ、肅然としたフロア。そこに設置される作品は、「ガラスの向こうの天や空と呼応して一体となり、宇宙の運行に沿って無限の気を孕み、目前の人々を大きく包むようなものにしたかった」と語る沢村澄子氏。大作「いろは歌」は、涅槃経の教え「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」が詠まれているともいわれ、無常観を説きながら、その先にある大光を指し示す。

〔プロフィール〕

1962年大阪生まれ。新潟大学教育学部特設書道科在学中より個展を中心に作品を発表、その数はこれまで100回を超える。国内外でのワークショップやパフォーマンス、他ジャンルとのコラボレーション、グループ展などにも積極的に参加。展示は床の間やギャラリー、美術館を飛び出し、インスタレーションとして建築や空間に呼応しながら野外にも広がる。書を「書くこと」と定義し、「描かないこと」で自作と絵画を分別する。第29回宮沢賢治賞奨励賞(2019年)、第73回芸術選奨文部科学大臣賞(2023年)を受賞。



撮影:木奥恵三

11.【新城大地郎】 **新作**

作品名:「東京、愛の森」

素 材:麻布キャンバス、墨

サイズ:H227.3cm×W181.8cm

機械化、規則化されていく時代においても、都市の中心であるこの街は不完全で不規則な空気感を纏っている。資本主義に生きる人間の根本にある無遠慮で無垢なエネルギーと、愛を過剰に求めるこの街の持つ奇妙な湿気は、混じり合い、独特の秩序を保っている。まるで発酵中かのようなこの不完全な熱量を新城大地郎氏はそのまま版画紙に写し取る。「東京の根」は地上高くに配置され、「東京、愛の森」はこの街の発酵を促すかのように地上に佇む。

〔プロフィール〕

1992年沖縄・宮古島生まれ。禅僧であり民俗学者でもある祖父を持ち、禅や仏教文化に親しみながら幼少期より書道を始める。禅や沖縄の精神文化を背景に、現代的で型に縛られない自由なスタイルで、伝統的な書に新たな光を当てている。書道に対する既成概念を軽やかに飛び越え、身体性や空間性を伴ったコンテンポラリーな表現を追求している。



撮影:木奥恵三

12.【佐々木類】 **新作**

作品名:「忘れじの記憶」

素 材:ガラス、植物(2022年7月から11月に新宿各所とアトリエのある金沢市近郊で採取)、LED

サイズ:H108cm×W394cm×D30cm(棚含む)

本施設高層エリアのラグジュアリーホテルBELLUSTAR TOKYO, A Pan Pacific Hotelに続く1階エントランスには、佐々木類氏による「植物」と「記憶」にまつわる作品。これらの植物は、自然と人の営みによる

環境で生まれた新宿や国内各地で採取された雑草や野草で、その土地と人の記憶を掬う。植物が取り入れた空気や水分や土は、泡などとして視覚化され、白い灰としてガラスの中に半永久的に保存された。物質的な土地の記憶とともに、この建物に関わり佐々木氏と一緒に植物採取した個人や佐々木自身の過去や現在、未来の記憶も同時に紡がれる。

協力:歌舞伎町公園、花園神社

〔プロフィール〕

高知生まれ。石川を拠点に、身近な自然や天気に関心を寄せ、主に保存が可能な素材であるガラスを用い、自分が存在する場所で知覚した「微かな懐かしさ」のありようを探求している。また、国内外の専門家とともに素材研究も行う。近年の主な展覧会に「インタラクション:響きあうところ」(2020年、富山市ガラス美術館)、個展「Subtle Intimacy: Here and There」(2023年、ポートランド日本庭園)がある。



撮影:木奥恵三

13.【玉山拓郎】 **新作**

作品名:「Unfamiliar Presences : Room (Red)」

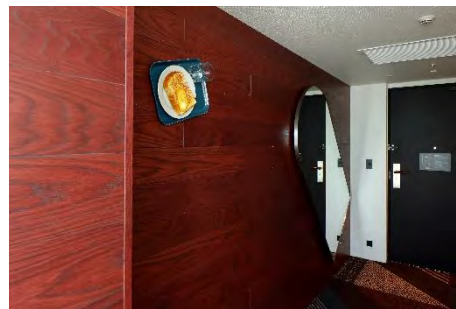
素 材:ミクストメディア

サイズ:約44㎡

窓から見える東京の街。その先の地平線は揺るぎない世界の基準として何時も変わらずに水平を保ち続けている。玉山拓郎氏はアーティストルームを訪れる宿泊客にその事実を少しずらして見る機会を提示する。見慣れた景色とものたちに見知らぬ存在が見えてくるかもしれない。

[プロフィール]

1990年岐阜生まれ、東京在住。身近にあるイメージを参照し生み出された家具や日用品のようなオブジェクト、映像の色調、モノの律動、鮮やかな照明や音響を組み合わせることによって、緻密なコンポジションを持った空間を表現している。近年の主な展覧会に「六本木クロッシング2022展:往来オーライ!」(2022年、森美術館)、「開館25周年記念コレクション展 VISION Part 1 光について / 光をともして」(2020年、豊田市美術館)など。



撮影:木奥恵三

14.【開発好明】 **新作**

作品名:「開発好明アーティストルーム/カセットテープ」

素 材:カセットテープ、カセットデッキ、クッション、ソファー

サイズ:約44㎡

膨大な音楽と街のノイズが収められている客室にはジャンルの違う音楽、場所の違う新宿の街のノイズ、そして、それらが録音された異なる時間が詰め込まれている。新宿の街を楽しんだ後、部屋で過去の新宿の音を聞く宿泊者は、窓からは現在(いま)の音が生み出されている新宿の景色を見ながら、重層的な音の体験をすることになるだろう。部屋には3台のレトロな気分にさせてくれるラジカセが置いてあり、気に入った音楽、異なる街の音などを3台同時にプレイして、時間軸の異なる音楽体験を楽しむことができる。

[プロフィール]

1966年山梨生まれ。社会にあるさまざまな出来事を時に鑑賞者を取り込み、ユーモアを交えた独自の視点とセンスで作品化する。80年代より国内外で精力的に発表を続けており、主な展覧会に、ヴェネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展(2004年)、「ベルリン-東京、東京-ベルリン」(2006年、ニューナショナルギャラリー、ベルリン)、個展「中二病」(2016年、市原湖畔美術館)など。東日本大震災後、被災地でのプロジェクトをライフワークとして継続中。



撮影:木奥恵三

15.【鷺尾友公】 **新作**

作品名:「Nobody's studio DISC-30」

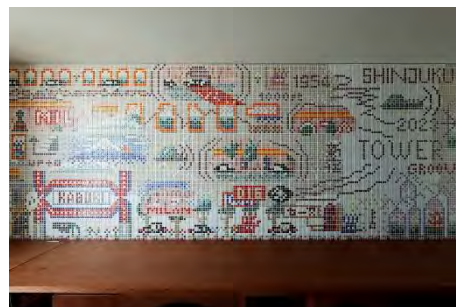
素 材:ミクストメディア

サイズ:約44㎡

クリエイターのアトリエ風の部屋を3つの客室で展開している鷺尾友公氏。客室に入るとまず目に飛び込むのが、歌舞伎町の3つの時間を示すタイル画。かつてここにあった「新宿TOKYU MILANO」も含む過去・現在・未来を、銭湯のようなノスタルジックな雰囲気とテレビゲームのようなレトロな感覚で表している。ベッドルームには空に浮かぶようにリラックスする美神の壁画が登場する。またヴィンテージのスピーカーやレコード棚が置かれ、音楽とともに暮らせる独自のインテリア空間を構成している。

[プロフィール]

愛知生まれ。独学で絵画を学び、街との関係性を軸に人物や事象などと関わり合いながら、イラストやデザイン、アニメーションなどジャンルを問わず、制作活動を人間の自由な行為として捉え表現している。街や商店街でクロスジャンルなコラボレーターと音楽企画も展開する。手に目と鼻が描かれたオリジナルモチーフの「手君」を美術館や海外で発表するなど、活動は多領域にわたる。主な展覧会にあいちトリエンナーレ2019などがある。



撮影:木奥恵三

16.【ぬQ】 **新作**

作品名:「ニュ〜新宿音頭」

素 材:映像(アニメーション)

サイズ:51秒

HOTEL GROOVE SHINJUKU, A PARKROYAL Hotelの客室テレビ映像などで見られる新作映像「ニュ〜新宿音頭」。東の海の真ん中に浮かぶ眠らない「新宿島」に、間欠泉が噴き出し、水の柱とともにうまれた一郎とふたこが、勢いに乗って島を探索する。煌びやかな看板、超高速回転寿司、カクテルのビル群など、見たことがないものが次々にあらわれ、人と街がジェットコースターのようにうねりながら一つのグルーヴを奏でる。

[プロフィール]

アニメーション作家。ポップでカラフルな作風でキャラクター「一郎」と「ふたこ」が動き回るアニメーション作品を中心に、CM、MV、キャラクターデザイン、装画など幅広く活動中。オリジナル作品『サイシュ〜ワ』が第23回文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門 審査委員会推薦作品に選出されるなど、国内外で多数上映されている。



撮影:木奥恵三

17.【西野達】 **新作** ※2022年12月22日発表

作品名:「新宿」

素 材:ミクストメディア(街灯、家具、本、服、バッグなど)

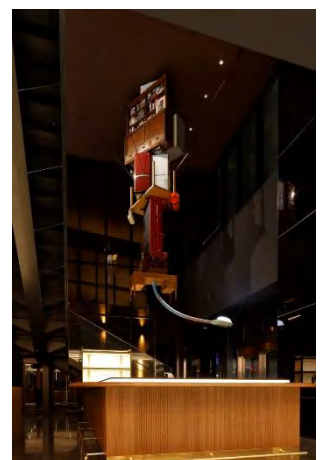
サイズ:約H750cm×W343cm×D155cm

新宿で実際に使われていた家具や日常品を使用することにより、江戸時代の宿場開設に始まる約320年前から綿々と続く新宿の歴史を作品に取り込む。区役所のスチール棚、紀伊國屋書店で長年使用されていた歴史あるテーブル、二丁目ゲイダンスクラブのキャッシャー台、新宿の名称の由来となった宿を象徴するホテル家具、などである。それらは、本施設の前身である新宿TOKYU MILANOの脇にあって、長い間新宿の夜を照らし続け、この地の歴史を見守ってきた街灯によって繋ぎ止められる。本作は、屋外の大規模なインスタレーションで知られる西野達氏の希少な屋内恒久設置作品といえる。

協力: AiSOTOPE LOUNGE、歌舞伎町商店街振興組合、紀伊国屋書店、新宿区役所、新宿ゴールデン街商店街振興組合、Smappa!Group

[プロフィール]

1960年愛知生まれ。屋外のモニュメントを取り込んで部屋を建築し実際にホテルとして営業するなど、公共空間を中心に大胆で冒険的な大型プロジェクトを行うことで国際的に知られる。主な展覧会に「CHILDHOOD」(2018年、パレ・ド・トーキョー、パリ)、「BEPPE PROJECT」(2017年、大分)、「Discovering Columbus」(2012年、Public Art Fund、ニューヨーク)、「The Merlion Hotel」(2011年、シンガポールビエンナーレ)など。平成29年度(第68回)芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。



撮影:木奥恵三

18.【竹中美幸】 **新作**

作品名:「ミラノ座の記憶」

素 材:アクリル板、35mmフィルム、フレーム(シルバー)

サイズ:H80cm×W120cm(2点)、W60cm(3点)、W160cm(3点)、W80cm(2点)、W40cm(1点) 計10点

映像用35mmフィルムを素材とし、かつてこの地にあった映画館・ミラノ座で使われていたアイテムや、昔の歌舞伎町の記録写真をモチーフに作品化する。一見すると輪郭が曖昧で図像がぼやけ抽象的だが、よく見るとミラノ座にまつわる様々な断片が繰り広げられている。目をつぶった時にうかぶぼんやりとした画像のように、見る者それぞれが自身の中に眠る記憶にアクセスできる。また同時に、この新たな場所、そしてここで流れるいくつもの物語が、未来の記憶へと刻まれていくことに繋がっていく。

[プロフィール]

1976年岐阜県生まれ。余白のある透明水彩の作品や、アクリル板や透明樹脂、35mm映像用フィルムなどを用いて制作。透明性、間、光/闇(影)、などを追求しながら制作しており、不確かなかたちをもって存在するものに常に反応しつつ生きていきたいと考えている。



撮影:木奥恵三

19. 【SIDE CORE】 **新作**

作品名:「Patchwork my city」

素 材:タイルほか

サイズ:可変

本施設シアターのホワイエの床タイルに、巨大な手や足跡、鍵などの絵柄が削り出された作品。特に巨大な掌は指紋に重ねて東京の地図やドローイングがコラージュされており、巨大な地図の上を歩きまわるように作品を鑑賞することができる。本作は演劇がかつて広場、有象無象が行き交う公共空間で生まれてきたことから着想を得ており、作品自体が広場となって人が歩き、行き交うことができる舞台となっている。



撮影:木奥恵三

20. 【SIDE CORE×しょうぶ学園】 **新作**

作品名:「Juxtaposition」

素 材:ミクストメディア

サイズ:可変

アーティスト・ユニットSIDE COREがキュレーションする3つの壁には、鹿児島にあるしょうぶ学園の工房で創作する作家23名と、SIDE COREのコミュニティの作家が参画し、さまざまな形と色、素材の絵画、文字、刺繍などのアート作品が肩を並べて展示されている。あらゆる表現がタイトル通りに「並列」されることは、単なるコンポジションを越え、SIDE COREが作家たちと過ごした時間や協働のあり方を思わせる。

参加作家:BIEN、KINJO、菊地良太、EVERYDAY HOLIDAY SQUAD

しょうぶ学園より、有川るり子、池山麻智子、石野敬祐、今村哲也、岩元哲文、鶴木二三子、翁長ノブ子、金澤伯亮、假屋昇平、黒田一夫、上妻裕一、河野僚賀、郡山義一、坂下理恵子、下川智美、泰良茂雄、高木琉生、中野誠剛、濱田幹雄、松久保滋朗、村田夏子、森節子、山下かおる、米山宜秀

[SIDE COREプロフィール]

2012年より活動を開始。メンバーは高須咲恵、松下徹、西広太志。公共空間におけるルールを紐解き、思考の転換、隙間への介入、表現やアクションの拡張を目的に、ストリートカルチャーを切り口として「都市空間における表現の拡張」をテーマに屋内・野外を問わず活動。「水の波紋展2021」(2021年、ワタリウム美術館周辺、東京)、「Out of Blueprints by Serpentine Galleries」(2020年、NOWNESS、ロンドン)など国内外の展覧会に精力的に参加。

[しょうぶ学園プロフィール]

1973年に鹿児島で開設された知的障がい者支援センター「しょうぶ学園」。障がいや支援に対する枠を取り払い、木工・陶芸・染め・織り・刺繍・和紙などの工芸を中心に、人が本質的に備えている創造する力を引き出し、つくることは生きることとして、個性と感性を発揮する環境のもと主に約100名の作家が創作している。

21. 【Chim ↑ Pom from Smappa!Group】 ※2022年12月22日発表

作品名:「ビルバーガー」

素 材:ミクストメディア(「にんげんレストラン」のビルから切り出された3階分のフロアの床、各階の残留物)ほか

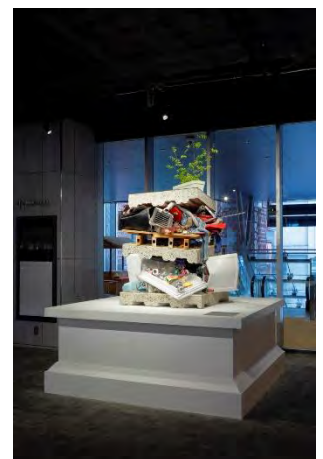
サイズ:約H186cm×W170cm×D155cm

解体直前の「歌舞伎町ブックセンタービル」で2016年に行ったプロジェクト「にんげんレストラン」で制作した、ビルの全フロアを切り抜き、そのままに積み重ね、ビル内の残留物を間に挟み込んだ巨大彫刻作品。壊す／建てる、という相反したプロセスによって「スクラップアンドビルド」を可視化しており、本施設2階エントランスに設置される。ユーモアを交えながら、大量生産・大量消費社会や都市のあり方に言及する。

作品協力:Smappa!Group、古藤寛也

[プロフィール]

2005年東京で結成されたアーティストコレクティブ。時代のリアルを追求し、現代社会へ全力で介入したメッセージ性の高い作品を発表する。2016、2018年に新宿・歌舞伎町のビルを舞台に大規模な展覧会を行い、話題を



撮影:木奥恵三

呼んだ。作品は世界を代表する海外の美術館にもコレクションされ、アジアを代表するコレクティブとして時代を切り開く。

22.【篠原有司男】 **新作** ※2022年12月22日発表

作品名:「オーロラの夢」

素 材:キャンバスにアクリル

サイズ:H180cmxW1000cm

新宿「ホワイトハウス」を拠点に活動した前衛芸術グループのメンバーである篠原有司男氏。代名詞と言える「ボクシング・ペインティング」は、絵筆の代わりにグローブに絵の具を浸しキャンバスをヒットして描く、時間軸をもった絵画作品。歌舞伎町で制作された本作は、日本の伝統的な絵画を思わせる色味を用い、伝統と革新の融合を、雄大に広がるオーロラのような大画面に描き出した。本施設1階エントランスにて、歌舞伎町の街のエネルギーを来館者に体感させる。

[プロフィール]

1932年東京生まれ。1960年に結成された「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」主要メンバー。新宿でのパフォーマンズや破天荒な活動で日本の美術界に衝撃を与える。1969年渡米以降、ニューヨークを拠点に活動。原色を大胆に使った大型の絵画や「ボクシング・ペインティング」など、エネルギッシュな作品で国内外から高い評価を受ける。



撮影:丸尾隆一

23.【森山大道】 ※2022年12月22日発表

作品名:「Untitled「Shinjuku」シリーズより」

素 材:ゼラチンシルバープリント

サイズ:各100cm×150cm、4点

半世紀以上にわたり新宿という街に魅せられてきた森山大道氏。わい雑と混沌に満ちたエネルギッシュな街、新宿を撮影した作品群から厳選し、本施設1階エントランスおよびBELLUSTAR TOKYO, A Pan Pacific HotelのPENTHOUSE客室内で展示。都市の欲望や身体性をあまねく捉える路上からの視点は、唯一無二の独創性に富んでいる。

[プロフィール]

1938年大阪生まれ。日本を代表する写真家のひとり。ハイコントラストのモノクロ画面、アレ・ブレ・ボケと評されるアブストラクトな表現が写真界に衝撃を与える。メトロポリタン美術館やカルティエ現代美術財団で個展を開催するなど、海外での評価も高く、2012年にニューヨークの国際写真センター(ICP)主催の第28回インフィニティ賞生涯功績部門を受賞、同年に「ウィリアムクライン+森山大道」展がテート・モダンで開催された。2019年には榮譽あるハッセルブラッド財団国際写真賞を受賞し、彼の作品が世界中から支持されている。



撮影:木奥恵三

24.【ムラタタケシ】 **新作**

作品名:「Kabukicho Larry」

素 材:映像

サイズ:15秒

「ラリー」と名づけられた犬が、何とも言えぬ抽象的なアクションを繰り返すムラタタケシ氏による映像作品。本施設1階の約200㎡のKABUKICHO TOWER VISIONで新宿の街を行き交う人に向けて上映される。一見すると、アニメのキャラクター像で描かれたラリーだが、その姿は湧き上がる水や噴水のような形に変わり続ける。本作のために新宿のゴールデン街を訪れたムラタ氏は、ニューヨークのローワーイーストで夜を明かした自身の経験を語り、お酒を楽しむ繁華街や新宿の地域の歴史に根付く「水」との関係に関心を寄せたという。ラリーも、そうしたムラタ氏の姿を示唆しているのかもしれない。

[プロフィール]

1974年シカゴ生まれ、ロサンゼルスを拠点に活動。動画ファイルをダウンロードする際に発生するエラーを用いたグリッチ・アートのビデオ作品をいち早く取り入れ、評価を得る。ビデオ、アニメーション、データモッシング、CGIな



撮影:木奥恵三

ど様々なメディアや手法を用い、イメージ生成のプロセスやデジタル表現の永続性について探求をおこなっている。サンフランシスコ近代美術館、スミソニアン・アメリカ美術館(ワシントンD.C.)などに作品がコレクションされている。

25.【浅井裕介】 **新作** ※2022年12月22日発表

作品名:「大地のこだま」

素 材:土(東急歌舞伎町タワー建設現場、歌舞伎町公園、十二社熊野神社境内、多武峯内藤神社境内、戸山公園内の内藤とうがらし畑、花園神社境内、など)、井戸水(花園神社境内)、アクリルレジン

サイズ:H210cm×W1520cm

地下2階に位置するバーラウンジの壁面に、浅井裕介氏の集めてきた日本各地の土に加えて本施設の建設現場や新宿界隈の神社や公園などから採取した土を用い、音楽と地層、水脈をテーマに、生命が生まれ、リズムを持って躍動するイメージが描き出された泥絵。

「一握りの土の中にもアメーバや菌類、目には見えなくとも何十億という微生物たちが活動している。見知らぬ土地へ出かけて土を掘り土に触れる時、いつも不思議な懐かしさを感じながら、その小さなものたちがこの巨大な世界を分解、再生し支えていることを思う。」

協力:歌舞伎町公園、十二社熊野神社、多武峯内藤神社、戸山公園、花園神社

[プロフィール]

1981年東京生まれ。土、水、埃、テープ、ペンなど身近な素材を用い、旅のチケットやコースターの裏に描かれたドローイングから巨大壁画まで様々なスケールで奔放に絵を描き続ける。大きな生き物の中に入れ子状に小さな動植物が現れるなど、ミクロの中にマクロが存在する生態系を表すような独特の表現は国内外で評価が高く、展覧会や芸術祭にも多数参加。2019年横浜文化賞 文化・芸術奨励賞受賞。



「大地のこだま」(部分) 撮影:木奥恵三

26.【足立喜一郎】 **新作**

作品名:「Hollow Moon (Ring)」

素 材:ミラー、発泡スチロール、樹脂、鉄、モーター、スプロケット、チェーンなど

サイズ:Φ243cm×D32cm

ダンスフロアの眩い光、欲望の渦の中で回り続けるミラーボールはさしずめ世俗の象徴であった。バブル期に興隆を極めた東京のディスコシーンはなおさらそれが色濃い。足立喜一郎氏はそれが崇高で神聖な領域に到達することを願う。幾千万のミラーで覆われた本作は、現在進行形の歌舞伎町に深遠な宇宙をシミュレートすることで、地下3階ライブホール／ナイトエンターテインメント施設のダンスフロアを訪れる人に「新しい象徴」とは何かを体感させる。

[プロフィール]

1979年大阪生まれ。多摩美術大学を卒業したのち東京で活動し、2016年より拠点をニューヨークへ移す。社会と自然の関係性に着目し、キネティック・アート(動く芸術作品)による彫刻などを作る。主な展覧会に、箱根彫刻の森美術館、シンガポール美術館、台北市立美術館、サンパウロ近代美術館、釜山ビエンナーレなど。東京都現代美術館に作品が所蔵されているほか、Meta社(Facebook)東京オフィスには大規模なコミッションワークがある。



撮影:木奥恵三

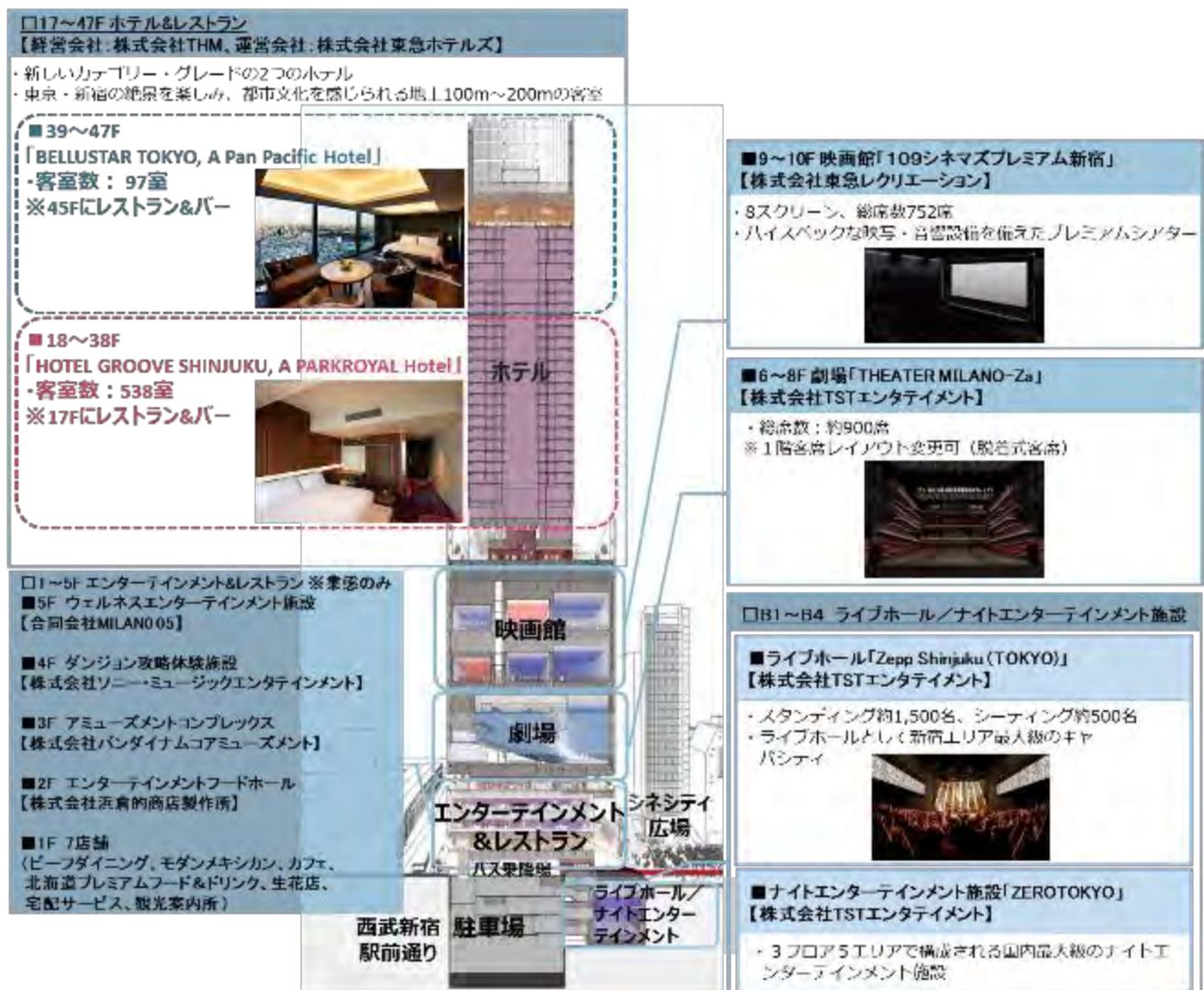
※本ニュースレターに掲載されている内容は現状の想定です。今後変更となる場合がございます。

【参考】

■計画概要

施設名称	東急歌舞伎町タワー
事業主体	東急株式会社、株式会社東急レクリエーション
所在地	東京都新宿区歌舞伎町一丁目29番1号
用途	ホテル、劇場、映画館、店舗、駐車場など
敷地面積	4,603.74㎡
延床面積	約87,400㎡
階数	地上48階、地下5階、塔屋1階
高さ	約225m
設計者	久米設計・東急設計コンサルタント設計共同企業体
外装デザイン	永山祐子建築設計
企画・プロデュース	株式会社POD
施工者	清水・東急建設共同企業体
竣工	2023年1月11日
開業	2023年4月14日 ※ホテルは5月19日開業

■建築計画概要



■建築デザイン

歌舞伎町エリアにかつて川が流れていたことや、現在でも歌舞伎町弁財天が水を司る女神として祀られていることから、本エリアの根源的な要素である「水」を外観モチーフ「噴水」として継承しています。歌舞伎町の根底に流れる水のエネルギーが噴水のように天に伸びる姿や、水の持つ純粋さ、常に変化する柔軟さ、透明な水・白い水飛沫が多層に重なり合う優雅な姿を表現したデザインとなっています。日本で「水」を意味する文様「青海波」を導入し、窓のセラミックプリントや低層外壁アルミキャスト、アーチ窓などで表現しています。



▲本施設外観

■ブランドロゴ

ブランドロゴはデザインエレメントとロゴタイプを組み合わせて構成しております。

デザインエレメントは、外観モチーフである噴水の要素と、ピアノの鍵盤や音響機器のイコライザーといった、エンターテインメント性を内包し、ロゴタイプは、複数のブロックの組み合わせでできており、文化やコンテンツ、行き交う人々など、さまざまな要素からなる歌舞伎町の多様性を表現しており、ブランドロゴ全体で、本施設が本エリアと一体となりさらなるにぎわい創出に寄与していきたいという願いを込めました。



▲ブランドロゴ

■コンセプト

本施設では、“好きを極める”をコンセプトに掲げています。ホテルとエンターテインメントの複合施設という特性を活かし、「見出す～育てる～羽ばたかせる」といった新たな「好き」を生み出すストーリーづくりに取り組みます。そして、リアルとオンラインを通じて、それらのストーリーと合わせながら、「好き」に出会う機会や、そこに集う方々の「好き」への情熱が交感される場を創出することで、極められたさまざまな「好き」の想いとともに街の未来や文化、延いてはさらなる多様性を紡いでいくこと(MASH UP)を目指します。



▲コンセプト図

■歌舞伎町一丁目地区開発計画(新宿TOKYU MILANO再開発計画)概要

歌舞伎町一丁目地区開発計画(新宿TOKYU MILANO再開発計画)では、東急歌舞伎町タワーの整備と合わせて、まちづくりへの貢献として、空港連絡バスの乗降場整備や、西武新宿駅前通りのリニューアルなどを実施するとともに、隣接するシネシティ広場を中心とした公共空間と本施設が一体となったエリアマネジメントを地域団体と連携して実施し、まちの回遊とにぎわいを創出していきます。



▲シネシティ広場と連動したイベントイメージ(映画イベント)



▲まちづくりへの貢献